

AJEQ ニュースレター

夏季号の内容

AJEQ/UNIFA 大会への期待：立花
ニュースレターへの特別寄稿文を募集：宮尾
AJEQ会員の特別寄稿文：(1)竹中、(2)伊達
大会報告公募について、研究会プログラム

AJEQ/UNIFA 大会への期待：立花副会長

日 本ケベック学会設立から今年で3年。小畑会長をはじめとした各会員の努力により、確実に学会としての底力がついてきました。

今年度は、震災のため延期になった研究会が、7月2日に開催されます。多数の方々の参加を願っています（研究会のプログラムは3ページ目に掲載）。

今年の秋に開催される予定の2011年度の年次大会は、東アジア・フランコフォニー大学 *Université Francophone d'Asie* (UNIFA) という拡大した形式になります。ケベック州政府在日事務所、フランス大使館、日仏会館との共催で、9月29日（木）から10月1日（土）までの3日間、東京の日仏会館で開催されます。

大規模な大会になりますが、招聘される学者・作家としては、憲法学者樋口陽一、社会学者ミシェル・ヴィヴィオルカ、比較人類学・古代ギリシャ研究家マルセル・ドティエヌ、社会学者ミシュリーヌ・ミロ、作家ダニー・ラフェリエールらが挙げられます。この内、ケベック州政府の支援で来日するのは、UQAM のミロ教授と、ハイチ出身モンリオール在住の作家ラフェリエールで、どちらも10月1日に講演が予定されています。ラフェリエールは、2009年にフランスのメディスス文学賞を受賞した大作家で、来日を記念して、2冊ほど邦訳が出るはずで

大会には、中国、台湾、韓国からも学者の参加があり、韓国ケベック学会から数名の発表者が送られてくるはずで

共催ですので、ケベックだけがテーマとして取り上げられるわけではありませんが、より広い視野の中でケベック研究を構築していく絶好の機会となるでしょう。AJEQ の会員からも少なからぬ発表者が予定されています。

大会は、講演、テーブル・ロンド・アトリエの形式に分かれますが、一部を除いて同時通訳がつきます。間もなくプログラムが発表されますが、会員各位の積極的な参加をお待ちしています（非会員も入場無料です）。—立花英裕副会長



昨年の大会での立花副会長の挨拶

日本ケベック学会(AJEQ)とは

「日本ケベック学会」(AJEQ)は、日本でのケベック・フランコフォニーに関する学術研究・芸術文化交流などを振興し推進する学会です。ケベックやフランコフォニーにご興味のある方の参加をお待ちしています。

学会活動の詳細は以下のホームページ(HP)とブログをご覧ください。

HP: <http://www.ajeqsite.org/>

ブログ: <http://ajeq.blog26.fc2.com>

ニュースレターへの特別寄稿文を募集

今季号より、この「AJEQニュースレター」が進化しました。これまでの2ページものが3ページものとなり、2ページ目には、ニュースレターのため特別に寄稿された論文が掲載されています。

これからは会員の皆さんから広く寄稿文を募り、ケベックについて様々な役立つ内容を会員の皆さんに、「会員特典」としてお送りしたいと思っておりますので、ふるってご投稿ください。

今回は、5月2日に行われたカナダの総選挙の結果、カナダ全体に加えて、特にケベック州で大きな政治的地図の変化が起こったことを、竹中豊会員が解説されています。

また、6月13日に上智大学で行われた、セルジュ・カンタン氏(ケベック大学トロワ・リヴィエール校哲学科教授)の講演会の詳しい報告を、伊達聖伸会員が書かれています。

それでは次ページをご覧ください(宮尾)。

AJEQ会員の特別寄稿文 (2011年6月28日)

「カナダの総選挙結果とケベック政治図の激変」 竹中 豊 (カタリス女子短期大学)

去る5月2日(月)にカナダで総選挙が実施されました。その選挙結果は予想に反するもので、S. ハーパー率いる与党カナダ保守党が過半数を獲得したものの、とくにケベック州においては、それ以上に大きな変化がおこりました。これはケベックの政治地誌を根本から塗り替えかねないほどの劇的な変化だと思います。数字で要約すると、下記のとおりです(ケベック州の結果)。

	(2008年)	(2011年)	(2008年)	(2011年)	
新民主党	1議席(12.1%)	58議席(42.9%)	カナダ保守党	10議席(21.7%)	6議席(16.5%)
ケベック連合	49議席(38.1%)	4議席(6%)	カナダ自由党	14議席(23.7%)	7議席(14.2%)

劇的な変化の主な現象は以下のとおり：

1. 新民主党は、西部で誕生した協同連邦党をその前身としており、1960年代に新民主党と改名したあとも、ブレイリーやオンタリオで議席を獲得していた政党でした。つまり、歴史的にはケベックにまったくルーツを持たない政党でした。2008年にはじめてケベック州から1名の議員が誕生し、それだけでも大きなニュースになったほどです。今回の躍進ぶりは、劇的かつ歴史的な変化です。もともと、それが一時的か、それとも将来的にも定着していくのかは不明です。党首Laytonの力量にもかかっているでしょう。
2. 新民主党は、1988年の総選挙で43議席(全国)を獲得したのが、今までの最大数。それが、今回は102議席と一気に3桁へ。同党が野党第一党になったのも、もちろんこれからはじめてです。
3. カナダ自由党は、元来、歴史的にはケベック州に大きな地盤をもっていたのが、今回はずたずたになったこと。かつて1984年の総選挙で40議席(全国)と大敗したことがあります。今回は、それを下回る34議席へ。しかも、野党第二党へ。この屈辱は、自由党結成以来、はじめてです。
4. ケベック連合のDuceppe党首は落選し、党首辞任を表明。

ともあれ、今回の総選挙は、大した争点もなく、つまらないものと踏んでいましたが、いざフタをあけると、すくなくとも舞台をケベックにかざれば、とんでもなくおもしろい現象をうみました。さすがに、世論調査会社の予測もほとんどはずれました。これから、ジャーナリズム的な発想だけでなく、その背景などを深く考察・分析する必要があると思っています。なにしろ、従来型のケベック政治図(あくまで連邦政治とのかわりあい)が土台からひっくり返ってしまったわけですから。

「カンタン教授講演会(於上智大学)の報告」 伊達聖伸(上智大学)

6月13日、上智大学にて、セルジュ・カンタン(ケベック大学トロワ・リヴィエール校哲学科)教授の講演会「宗教からの脱出、ネーションからの脱出——フランスのライシテ、ケベックのサバイバル」が行なわれた。概要はすでにAJEQのブログで紹介しているが、もう少し内容に踏み込んで講演会の様子を振り返ってみたい。

講演会は、学部学生も聴講したため、カンタン教授はまず、カナダにおけるケベックの位置の独自性について歴史的な概観を行なった。とりわけ、1837年のパピノーの反乱、ダラム報告書、1840年の連合法の一連の流れに言及し、フランス系カナダ人が英米系の資本主義に屈するプロレタリアートになった歴史的経緯を説明した。また、ルイ・エモンの『マリア・シャブドレーヌ』(邦訳『白き処女地』)からの引用を交え、ケベックにおけるサバイバル(生き残り)のイデオロギーの生成について論じた。そのうえで、1960年代の静かな革命が、いかに大きな変化であったかを浮き彫りにした。

次いで、フランスの哲学者マルセル・ゴージェの著作からケベックの近代と宗教を考えるために、ゴージェの「宗教からの脱出」理論の概要を説明した。一般理論としての「宗教からの脱出」が、各国や各地域でいかなる形をとるか、偶然性に説明のつく位置を与えてやることが重要であると論じられた。

フランスにおける宗教からの脱出は、ライシテという言葉によって特徴づけられ、その第一段階は「政治の自律化」(ただし宗教的な正当化が必要とされる)、第二段階は「政治と宗教の分離」を指標としている。ライシテは、他律への服従を説くカトリックを引き立て役として、自分自身の威光を輝かせることができた。

カンタン教授によれば、フランスにおける「宗教からの脱出」は、3世紀半にわたるプロセスだが、ケベックにおいては、20世紀後半に急速に進んだものである。逆に言えば、どうしてそれまでケベックでは「宗教からの脱出」が起こらなかったのかが問われることになる。カンタン教授は、フェルナン・デュモンを引用しながら、ケベック社会の骨格となるものがカトリック教会以外になかった事情から、政府や政治的なもの不在あるいは弱さを埋め合わせる「代行」の役割を果たしてきたと論じた。

そしてカンタン教授は、静かな革命以降のケベック社会は、宗教からの脱出と同時に、フランス系カナダ人というネーションからの脱出も経験していると述べた(「フランス系カナダ人」から「ケベック人」への転換)。この「二重の脱出」は「開かれたもの」であろうとし、ケベック州政府も福祉国家建設に主導的な役割を果たした。ところが、このようなケベック州政府の権限拡大は、従来の社会関係やネーションを解体する力としてはたらく。現在の政治は社会をリードする立場ではなく、社会に追従することになっている。カンタン教授は、ここに現代民主主義の困難さが表われていると述べるとともに、前に進むためには、おそらくケベック人の悲劇の歴史を恥じることなく想起することから始めなければならない、と結論づけた。

質疑応答では、竹中理事より、ケベックのカトリックに将来はあるのか、という質問が出た。カンタン教授は、教会離れという形で脱制度化は進行しているが、意味の問題がなくなったわけではないと回答した。仲村会員からは、ケベック州以外のフランス系カナダ人のアイデンティティがどのようなものであったのか、という質問があった。カンタン教授からは、19世紀半ばから20世紀前半にかけて、ケベック州外への人口流出が進んだことについての解説があった。

AJEQ年次大会の報告公募について

10月1日に「日本ケベック学会2011年度全国大会」が開催されますが、会員の皆様から、「自由論題」セッションでの研究報告者を公募します。報告ご希望の方は、下記の応募要項を参照のうえ、委員長までお知らせください。

大会日程：日時：2011年10月1日（土）

東アジア・フランコフォン大学（Université Francophone d'Asie de l'Est, 略称UNIFA）との共催のため、全体の開催期間は9月29日（木）～10月1日（土）。

大会会場：日仏会館（東京・恵比寿）

<公募要領>

1. 応募方法：

題目（日本語および仏語）、日本語か仏語かどちらか一方の報告要旨（日本語の場合、200～300字程度。仏語の場合、150～200語程度）、所属（日本語および仏語）、

報告者名（日本語および仏語）、連絡先（日本語）を委員長あてにメールにて送付。

竹中 豊（カリタス女子短期大学）：

メールアドレス：bernardtakenaka（ここに@を入れる）nifty.com

2. 公募期限：2011年6月30日（期限確認は上記に連絡）

3. 公募人数：3名

4. 報告時間（質疑応答時間は除く）：1名20分

5. 報告者の条件

(a) 日本ケベック学会の会員であること。

(b) 非会員の場合は、大会報告時までに入会手続きを完了していること。

6. 報告公募選考結果の通知：

当該委員会での協議を踏まえたうえで、7月中旬までに運営委員長より連絡。

AJEQ研究会プログラム(7月2日)

日時：2011年7月2日(土) 16:00-17:30

会場：明治大学駿河台校舎研究棟4階第二会議室

発表：

1) 森田明彦会員

「チャールズ・テイラー『ディレンマと連関』」

（概要）ケベック州在住の思想家であるチャールズ・テイラーは2007年に西洋近代の世俗化の精神史的研究『世俗の時代』を刊行した後も、現代世界と宗教の関係について考察を深め、本年初めに新著『ディレンマと連関（Dilemmas and Connections）』を発表した。今回の研究発表では、『世俗の時代』以降のテイラーの新たな洞察に焦点を当てたい。

2) 伊達聖伸会員

「現代ケベックにおける「宗教」概念の変容——カトリックの戦略に注目して」

（概要）ケベック社会は「静かな革命」以来、大きな変貌を遂げてきた。宗教に注目するならば、それは世俗化の進展であったと言えよう。ただし、これは宗教の衰退と一口でまとめられるような単純なプロセスではない。カトリックは、多元主義の動向を踏まえつつも、「伝統文化」として「再構成」されている。本発表では、カトリックが宗派教育を前提としていた時代から、「倫理」や「文化」に依拠した語り方に転換する様子を見ていきたい。

問合せ先：矢頭：norieyazu-k（ここに@を入れる）jcom.home.ne.jp

後記

7月2日開催のAJEQ研究会のポスター(写真)が、安田敬理事によって作成されました。以下のリンクをご覧ください。

<http://www.ajeqsite.org/img/AJEQ2011.jpg>

この研究会は今回最初の試みですが、AJEQの年次大会に次ぐ正式な活動として継続され充実していくことが期待されます。

私どもは、このような活動を広報、記録、発信していく役割を、ブログ、HP、ニュースレターなどを通じて果たしていくつもりですので、今後とも会員の皆様のご協力をよろしくお願いたします。加納、宮尾

AJEQ ニュースレター

年3回発行

発行人・小畑精和

編集人・加納由起子、宮尾尊弘

日本ケベック学会

AJEQ ホームページ

日本でのケベックおよびフランコフォニーに関する学術研究・芸術文化交流を振興し推進する学会のHP

日本ケベック学会(10年10月～)

●主要役員

小畑精和（会長） ●広報 HP 担当

小倉和子（副会長） 加納由起子

立花英裕（副会長） 小松祐子

池内光久（監事） 安田 敬

曾田修司（監事） 宮尾尊弘

S. エティエ（顧問）*

*現在はC.Y. シャロン氏がケベック州政府在日事務所代表。